

か七日の夜、庚申にあたれり、ながく亥き夜をつくぐとやはあかすべきとおもほして、  
みすのうちにさぶらふおもと人、みはしのもとにまいれるまうちぎみたちに、歌よませあ  
そびせさせ給ふ、歌の題にいはく、松の風よることにいる、これにつけてきけば、あし引の  
山おろしにひゞくなるまつのふかみどりも、うば玉の夜はにきこゆることのおも亥ろさ  
も、ひとへにみなみだれあひゆき通ひて、むべもむかしの人、松風に入といふことの詩句を  
つくりおきそめけんとなむおもほえける、順がかしらのかみ、夏も冬もわかぬ雪かとあや  
またれ、心のやみはからにも大和にもすべてつきなく、おまへのやり水にうかべるのこり  
の菊に思ひあはすれば、いづみばかりに亥づめる身はづかしく、なにたかききぬがさをか  
にてるものみぢばを見わたせば、かゝるまとゐにさぶらふことさへまばゆけれど、さもあら  
ばあれ、人こそき、てそしりわらはめ、かけまくもかしこきおほんかみは、哀ともめぐみさ  
いはい給ひてん、今いにしへを見るがごとく、こよひの事を後の人もみよとて、書かるして  
奉るは仰ごとに亥たがふ也、

夜をさむみことにしもいる松風は君にひかれて千代やそふらん

貞元元年初、齋宮侍従のくりやに御坐する間に、八月廿八日庚申の夜、人々あそびいはひの  
心をよむ。

神代より色もかはらで竹川のよ、をば君ぞかぞへわたらん

〔源氏物語東屋〕なをくしきあたりともいはず、いきをひにひかされて、よきわか人どもつどひ、  
さうぞく有さまはえならずと、のへつ、こしおれたるうたあはせ、物がたり、かうしんをしま  
ばゆく、みぐるしく、あそびがちにこのめるを、このけさうのきみだち、らうくしくこそあるべ  
けれ、